

まんだら通信

第160号 (通巻192号)

平成21年(2009)10月 佛誕2575年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

たまたま何かの巡り合わせで



9月4日、防災訓練中の市自衛消防団の人たちです。

私のもとに、毎月、「まんだら通信」というB4サイズのミニコミの通信が送られてくる。折々のできごとが仏教の法話にからめて語られ、フォームと反省させられたり、ホッと温かい気持ちになったり。カラープリントされた写真も美しい。

この通信、きれいな海で名高い千葉県白浜町にある紫雲寺の住職、高橋龍渉さんが愛用のマックで手作りしている。発行部数は5〜600部もあり、読者は地域の人や檀家などだそう。初めてお目にかかったから、もう7年以上になるのに、きちんと届けてくださる。

を着て熱心に撮影している男性がいて、つぎ同業者だと思いついて挨拶したのが出会いだ。

高橋さんにとってお寺は、「規制の緩やかな公民館」であり、「町の歴史を保存しておく図書館」。お堂で地元の音楽サークルがコンサートをしたり、境内が子供たちのバーベキューの会場になったり。また、自らカメラを下げ、地域のさまざまな行事やイベントに精力的に顔を出し、町の歴史を記録している。

高橋さんの父親は満州の開拓団付きの医師だったが、引き揚げの途中、母親と妹とともに亡くなった。たまたま日本の親類の元にいた高橋さんだけが生き残った。あるとき、寺の世話人から、住職の弟子が戦死して跡継ぎがないから、住職にならなにかと持ちかけられる。そうして、中学を卒業すると京都の本山で修行。修行中に先代が亡くなり、20歳で寺を継いだ。住職としての生活も、まもなく半世紀になる。

「自分は寺に生まれたわけでもなく、何かの力に導かれ、たまたまなったのですよ。だから、寺はみんなのものだと思っているんです」

たんとんと語っていた高橋さんのことを、このごろよく思い出す。

「ふと気づくと、こうしていた。」「たまたま、こうなった。」「なにかの巡り合わせで、自分のところに機会が巡ってきた。」「仕事」というのは、そんなものかもしれない。

「任える事」と書くもの。自分のところに巡ってきたご縁を、「有り難いこっちゃ 結構なこっちゃ」(まんだら通信、2002年10月号)と受け、精いっぱい使命、真摯な義務感、謙虚

な責任感でもって成していく。ひたむきに打ち込んで、死ぬ時に、ああ天職だったのかなあ、と振り返ることができたら、それが幸せなのかもしれない。

自信と信念をもって、いつも自分の真ん中にたつぷりと愛をたえていたい。こうだと思ふことを、コツコツと続けたい。いっただってどれだけの人を幸せにすることができると考えていた。

「まんだら通信」が届くと、そういう誠実な気持ちになる。

(楽大ブログ 沢木遙の『幸せ力をつける練習日記』2009年8月30日)

たった一度お会いしただけに、ずっとおつきあいが続くという、そんな間柄があります。千葉県四街道市に県立盲学校があります。12年前、修学旅行で生徒さんが県内一周したとき「フローラルホール」でコンサートをしました。同行取材をしていたのが、上の文章をお書きになった、当時朝日新聞柏支店の、ペンネーム沢木遥さんです。町のコーラスグループ「マリン・ブルー」も賛助出演するというので写真撮影に行き、沢木さんにお会いしました。

立ち話でしたが、後でゆっくり話を聞きたいということだったように憶えています。

翌朝おいでになり、銀杏の樹の下のプレハブで半日四方山話をして、一緒に冷や麦の簡単なお昼を済ませ、館山駅までお送りしました。

その記事が沢木さん連載の『街模様』の、『寺は地域の公民館』でした。

早いものであれから12年、お会いしたのはその時だけですが、年賀状には余白にびっしりと「商売がたきの読売の記者と結婚しました」「子供が生まれました」「二児の親になりました」など一年の出来事が綴られています。

5年前「何かの巡り合わせ」で、インターネットで上の文章を見つけました。おそらく百万以上はあるだろうブログという日記風の書き物の中から見つかるなど、まったく不思議なご縁という他ありません。あの日、雨上がりの館山駅前で写した、娘さん時代の写真は今もパソコンの上で微笑んでいます。

余滴

◆この『まんだら通信』は、「何かの巡り合わせを」有り難いこっちゃ 結構なこっちゃ」と受け、精いっぱい使命、真摯な義務感、謙虚な責任感でもって成していく。と、いうほどのものでは勿論なくて「みなさん、この1ヶ月もお元気でしたか。私もご覧の通り何とかやっています。」という程度の気持ちで続けています。

75歳という年齢ですから、いつまで続くのか分かりませんが、力仕事ではないので寝たきりになっても、その点は大丈夫でしょうが、自分は大丈夫と思っても「頭の配線」がおかしくなれば、これはもう仕方ありませんね。

あのお方に「もういいから帰っておいで」といわれるまで、淡々と続けられれば私自身言うことはありません。

そうなるまで、誰かが続けてくれるかと思っていますが、書き手が変わったら「はあ。やっぱり。」と思って戴ければ宜しいかと。

ただ少しだけ気がかりなことは、例年秋になると体重が増えるのに、今年は45キログラムのまま一向に増えません。

どこか不具合は思い当たらないのですが。

◆今月の野草は、ご存知セイトカアワダチソウ【きく科アキ

ノキリンソウ属】です。

北アメリカ原産で、明治時代に切り花用として輸入された帰化植物だそうですから、それほど新しい植物ではないですね。戦後、米軍の輸入物資に混じていた種子などによって、急に広まったというのが定説のようです。ひと頃、花粉症の原因ではと騒がれましたが、関係ないのだそうですね。

やたらにはびこって困り者ですが、アラバマ州の花になっているなどというように、よく見るとなかなかきれいな花です。写真のミツバチはわが家の住人で、おなかがいっぱいに膨れています。

09.10.08 龍渉



につぼん人情小噺

第四十六話 絆きずな

えー、今年の夏は大変なことが起こりましたね。

ひとつは、衆議院選挙。政権交代がついに起こりました。おとなしい日本人がついに怒ったんでしょうね。これで行きたい私たちの暮らしがどう変わるか、しばらく様子をうかがいましょう。

我が家では、もうとつづくに「政権交代」が実現しておりますが……。しかたがない野党でございますが……。しかたがないんですよ。「惚れた数から振られた数を引けば女房が残るだけ」。私は妻さえいてくれれば、もともと、野党でもなんでも幸せなんですから。

しかし、世の中には変わっていいものと変わってはいけないものがあります。絶対に変わってはいけないもの。それは、「親子の絆」でございます。

今日は、今年の夏に起こった、ある「悲劇」を通して、そのことを皆さんと考えたいと思います。

夏休み。子供さんのいらつしやる家庭では、ふだんは忙しいお父さんたちも、この期間だけは、どなたも家庭サービスをお考えになりますよね。

休暇を取りまして、おじいちゃんやおばあちゃんの待つている故郷に帰省される方もいらつしやれば、「今年は海に行こう」とか、「キャンプをしよう」などと、家族旅行を計画する方もいますね。また、子供たちもお父さんといつしよに遊べるっていうんで、とても楽しかったでしょうね。

九州で暮らしております吉川光一さん（仮名）のお宅もそうでした。

まあ、もともと地元の方ですから、帰省はしなくてもよかったですね。

吉川さんは会社員で、いつもは朝早くから深夜まで働いておりましたが、そんな吉川さんもうやく夏休みが取れることになりまして、子供たちと「どこに行こうか」などと相談をしておりました。

吉川さんは、奥さんの和江さん（仮名）、小学校一年生の隆君（仮名）、保育園児の宏美ちゃん（仮名）の四大家族。仲の良いご家庭です。

「いよいよ、パパも夏休みが取れそうですよ。どこに行こうか」

「海がいい！」

「パパとドライブ！」

その夜も来るべきお父さんの夏休みを楽しみに、子供たちは眠りにつきました。「それにしても、ひどい雨だわ。台風でもないのに、こんなに強い雨が続くなんて変な天気ね」

「そうだなあ、地球温暖化の影響だろうね。日本は亜熱帯地方になつちやつたみたいだな」

吉川さんと妻の和江さんがそんな語らいをしていた深夜、けたたましく電話が鳴りました。

「大変です。近くの川が氾濫しました。このままでは、川沿いの吉川さんのお宅は流されます。早く公民館に避難してください！」

「隆！ 宏美！ 起きて、起きて！ 大変よ、逃げるのよ！」

和江さんはあわてて、隣の部屋で寝ている子供たちを起こしました、吉川さんが家のカーテンを開けて外を見ると、まるで白い槍のような雨が地面に突き刺さり、家の前には黒い濁流が押し寄せていました。

「逃げるぞ！ 俺は隆を連れて出るか

ら、君は宏美を頼む」

ところが水の勢いで玄関のドアが開きません。

ふたりで必死でドアを押しして、ようやく外に出ました。出たとたん、体じゅうが滝にでも打たれたがごとく、びしょぬれです。

吉川さんの家の前には、小さな川があるのですが、吉川さんの目にはどろろ川なのか、道路なのかまったくわからないほどでした。そして、あつという間に、その泥水は膝まで達してきました。

「隆！ 宏美！」

吉川さんはあらんかぎりの大きな声で叫んだのですが、その声も豪雨と濁流の音でかき消されてしまいました。

翌日、吉川さんと隆君が、自宅から六キロも離れた田んぼのなかで、寄り添うように亡くなっているのが見つかりました。

お父さんの腕と隆君の腰は、ロープできつく結ばれていたそうです。腕には、隆君を支えたロープの跡が深く深く刻み込まれていました。

「たとえ流されても、子供と絶対に離れまい」

吉川さんの強い思いが、発見者の涙を誘いました。そして、「いつも寝顔しか見てやれんから、休みの日はしつかりと遊んでやるんや」と言っていた吉川さんの口癖も、人づてに伝わり、近所の人たちはそれを聞いて、泣き崩れたそうです。

そして、さらにその翌日、残念ながら、その近くで妻の和江さんと宏美ちゃんの遺体も見つかりました。激流のなか、身を寄せ合っていたのでしょうか。宏美ちゃんの顔には、かすり傷ひとつなかったそうです。

近くに落ちていた、和江さんが持ち出

したと思われる黒いポストンバッグが遺品となりました。

警察がなかを開けると、バッグがはちきれんばかりに、隆君と宏美ちゃんの着替えが、ぎつしりと詰まっていたそうです。

本当の意味での「親子の絆」……。

ご冥福を心から、お祈り申し上げます。

月刊誌『MOKU』に毎月、落語家の三遊亭鳳豊さんのお話載っています。著作権の關係で普通は転載は難しいのですが、特別のお許しで転載しています。

太っ腹のご当人には、何れお会いしてお礼を言わなければと思っております。

今月は、いつものようなハッピーエンドのお話ではないのですが、親の愛情に心を打たれて載せました。

学者の意見は寒冷化と温暖化は半々だそうですね。今、「地球は温暖化しているから、今のうちに対策が必要」といっている学者の大部分が、20年前には地球は寒くなっていると言っていた人だそうですね。二酸化炭素が増えると地球が温暖化するから、それを減らさなければいけないと、皆が言っていますが嘘っぱちだと言っている学者は9割だそうですね。経済成長一点張りの政治家が、金もうけの手伝いでそんな根も葉もないことを言ったら、未来の子孫のために、無駄なことはやめなさいというのがマスコミの役目と違いますが。

マスコミは社会の木鐸とか社会の公器といわれます。学者や政治家や企業のことについて、言っていることが本当かどうか調べて、「これは間違いではないのですか」などと言わなければなりません。読者・視聴者は、それを期待してお金を払っているのですから。「地球温暖化は二酸化炭素が原因」という話があったら、本当にその通りなのか調べてくれないと役目を果たしたことになります。地球が暖かくなっているのか、それとも寒くなっているのか、